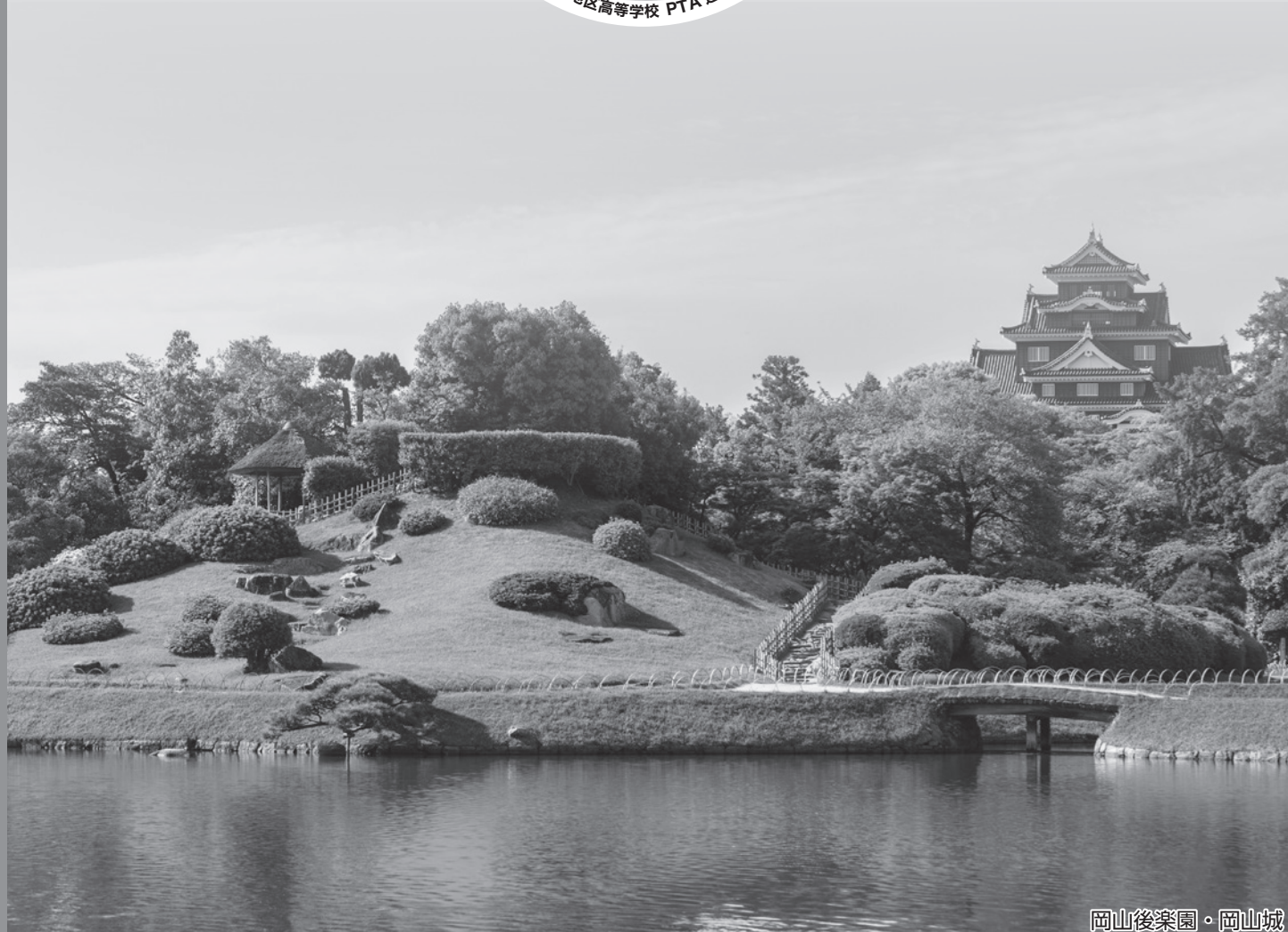


| 高校生の活動発表 |



「ワッショイ!とーかーず」

岡山県立倉敷古城池高等学校

本校は、昭和55年設立。倉敷の普通科高校として4番目に開校した本校は、全校生と約840人、合言葉はAgencyです。Agencyとは、自ら考え、主体的に行動して、責任を持って社会変革を実現していく姿勢や意欲のことを表します。「共に学び、共に伸びる古城池、可能性への挑戦」をスローガンとし、地域との連携を大切にし、主体的に行動し、社会に貢献する活動に取り組んでいます。また、進取の気風・自律の行動・真理の探究・情操の涵養を教育目標に掲げ、社会で活躍しその発展に貢献する人材の育成を目指しています。



本校では、1年次から総合的な探究の時間が、大変充実しています。この時間のことを、古城池のK、タイムのT、略してKTと呼んでいます。自分の興味のある学問について、より深く知るために、分野別に分かれて地域との連携を取りながら、活動の場を校外へと広げています。私は、KT小学校分野に所属しています。将来は教育に携わる職業に就くために、地域との交流が教育に与える影響について探究しています。

私は、KT中学校教育分野に所属しており、現在、家族や家庭の問題を課題設定とし、家庭内暴力や単独世帯の増加、老老介護などの解決策について研究をしています。将来は、家庭科の教員になることが目標です。

表題にある、「ワッショイ!とーかーず」とは、校外での活動時に私たちが使用している呼び名です。ワッショイという、地域を盛り上げる言葉と、本校のシンボルでもある藤の花と、話す人・トーカーを掛けた言葉の複数形です。これらの取り組みの多くは、先輩方から引き継いだり、影響を受けたり、ブラッシュアップしながら、現在進行形で進められているものです。ワッショイ!とーかーずとしての活動の取り組みを紹介します。

こども食堂



始めに、子ども食堂についてです。子ども食堂というワードを聞いて、何か聞いたことがある方、知っていることがある方は、挙手をお願いします。ありがとうございます。私たちが通っている水島地域には、「おはな」と「ミソラ」の二つの子ども食堂があり、生徒がボランティアとして参加しています。食事を提供するだけでなく、本の読み聞かせなども行い、みんなで楽しい時間を過ごしています。食事

を待っている間に何かできないかと、本校の美術部が主体となり「アートで遊ぼう」をテーマに、うちのデザインをして楽しみました。自分の好きな色をたくさん使い、自分だけのオリジナルうちわを作った子どもたちはとてもうれしそうで、その様子を見て私たちもとてもうれしかったです。同時に、何か一つの物を作ったときの達成感を感じてもらえていたらうれしいなと感じました。この写真はみんなで食事をしている

写真で、子どもたちだけでなく保護者の方々にも楽しんでもらえるような会にすることが、子ども食堂を通しての私たちの目標です。

次に、フードロス削減に向けての取り組みです。私たちはフードロスについて学び、日本では年間、約646万トンのフードロスが発生していることを知りました。また、1人当たりお茶わん1杯分の食品を毎日捨てていて、7人に1人の子どもが貧困状態にあります。そんな日本の現状を何とかしたいと思い、私たちは、コノヒトカンプロジェクトに興味を持ちました。今日は、実際に、コノヒトカンを持ってきました。コノヒトカンとは、廃棄されてしまう食材を有効活用し、長期保存が可能で、簡単に食べることができる缶詰のことです。こちらが牛肉の脂身の部分や、ニンニクや、タマネギ等、シンプルな食材と、

トマトピューレをベースに煮込んだ肉缶です。サワラ、サバ、サケ、赤身を骨ごとぶつ切りにしてカレー粉をまぶし、レンコンや、ゴボウや、ニンジンを入れた魚缶です。この缶詰を使って、子ども食堂で高校生企画を開催し、参加して下さった方々と一緒に食事を楽しみました。また、この経験を生かして近隣の小学校を訪問し、講座を開きました。毎日温かいご飯が食べられるのは当たり前ではないということ、少しでも多くの皆さんに知っていただきたいという私たちの思いから、企画に至りました。少し不安な部分もありましたが真剣なまなざしで聞いてくれたので、とてもうれしかったです。食品ロス講座などを通した後、私



たちはサルベージパーティーを開きました。サルベージパーティーとは、各家庭で余っている食材や、賞味期限の近い食材を持ち寄り、その場でレシピを考え調理して食べるパーティーのことです。近隣のスーパーからも廃棄前の食材を頂き、たくさんの料理を作ることができました。子ども食堂の子どもたちだけでなく、地域の方の参加も募り、私たちの力だけでは思い付かなかったレシピや、食材の使い方

などを教えていただくことができました。子ども食堂についての活動紹介は以上です。

次に、公民館講座について紹介します。小中学校までの経験や学習は、家庭環境によって大きく異なります。経済格差や教育格差などは、現代社会の大きな課題であるとも思います。そこで、私たちが考えた解決策は、保護者なしで利用することのできる公民館講座を利用して、子どもたちがさまざまな体験をする機会をつくることでした。学校から一番近くにある、福田公民館という場所を利用して活動を行っています。福田公民館を利用した活動紹介として、始めにボッチャ体験です。この活動は、KT教育学分野の人が主体となり行ったものです。ボッチャを選んだ理由は、ボッチャはパラリンピックの種目でもあり、大人、子ども、老若男女関係なく、みんなが平等に楽しく遊べるスポーツだからです。当日は、地

福田公民館 + 食品ロス講座

サルベージパーティー



福田公民館

ボッチャ体験



域の方がたくさん集まってくださり、みんなで地域交流を深めることができました。企画から打ち合わせ、準備、当日の実施まで、一つの行事をつくり上げることはとても大変でした。ですが、その経験がとてもよい勉強となりました。

次に、私が所属している書道部で行った、お習字お助け隊講座について紹介します。親子共に冬休みの宿題の強敵である書き初め。今までに書き初めの宿題に苦戦したことのある方は、挙手をお願いします。ありがとうございます。正直、教えるのも大変だし、部屋が汚れてしまったらと、場所も限られてしまうことも

福田公民館
お習字お助け隊



多いと思います。そこで、高校生が単発で教える講座なら、お習字を習っていない人でも参加しやすいはず、少しでも上達できたらきっと書き初めも楽しくなるはず。そんな思いを込めて企画したのが、このお習字お助け隊講座でした。児童1人に高校生の先生が1人付いての実技指導を行い、お互いの緊張をほぐすために筆を使って絵しりとりをしました。名前手本は書道部員が、それぞれ児童の名前を書いて用意して本番に臨みました。この日の最初に書いたものと最後に書いたものを比べる鑑賞の時間を取った際には、参加した児童全員が「前より上手に書けた」と満足そうに喜んでくれたのでとてもうれしかったです。

次に、水島財団とのコラボ企画について紹介します。まずは、水島コンビナートクルージングツアーです。「水島の郊外から持続可能な未来を、そして地域と共に新しい価値をつくり出す」を目標に掲げ、イベントとして、水島コンビナートに立地する代表的企業を訪問し、企業概要や生産品などのインタビューをもとに、水島港の船上からコンビナートを見学する、水島港クルージングを行いました。その際には、古城池生が実際に案内役となって説明をしていきました。ツアーを開催するにあたって、自分たちでパンフレットの制作も手掛けました。

同じく水島財団とコラボした活動として、海岸の生物と海岸ごみの調査を行いました。この活動は、KT農学部環境分野の人が主体となり行っているものです。令和3年から2年以上にわたり、倉敷市児島の通生海岸で活動を継続しています。この海岸には、干潟と岩の多い磯が多くあり、とてもたくさんの生物を観察することができます。準絶滅危惧種である貝やゴカイも生息しており、そのような生物が身近にいることに驚きました。一方で、海岸に漂着するごみも多いです。ペットボトルやお菓子の袋など、陸で発生して流れ着いたと考えられるごみや、農業・漁業で発生したと考えられるごみが多いです。そして、海に流入するごみを減らす方法を模索する研究も進めています。

水島・藤戸ツアー



みずしま財団とのコラボ企画

海岸の生物と海岸ごみの調査



次に、水島・藤戸ツアーについての紹介です。この活動は、KT社会学分野の人が主体となり行ったものです。地元についての理解を深め、地域資源の

発掘や地域活性化に向けて、水島・藤戸ツアーを開催しました。水島の歴史や水島コンビナート、水島と藤戸で行われた源平合戦について、生徒自身が調査して、後輩や地域の方々に、その魅力を伝えていくものです。バスや現地では実際に生徒がガイド役を務めました。ガイドの原稿制作を通して、複数の立場の意見があることを知り、それらを取り入れ、後輩や地域の方々へ地域の魅力を伝えることで、活動の持続可能性を高めることができました。

最後に、水島港待合所壁面塗装プロジェクトについてご紹介します。ボランティアとして集まった古城池生が水島港をもっと盛り上げたいと思い、壁のデザインを手掛けました。先ほどもご紹介したように、古城池高校のシンボルでもある藤の花や、港の湖をイメージした半円形の模様を描きました。さらに、国際交流の発展を願って、韓国語、中国語、英語で、「ようこそ」のメッセージを添えました。水島港ボランティアの方々にも、たくさんの称賛の声をいただけて、とてもうれしかったです。



以上が、これまでに私たちが行った活動の紹介です。いかがだったでしょうか。このようなすてきな機会や経験を通して、私たちは高校生が地域で活動する意義について考え、まとめてみました。まず、地域側から見て、私たちは、以前お世話になった地域の方々にインタビューをさせていただきました。すると、私たち高校生の最大の武器は「若さ」だと、おっしゃっていました。高齢者の方にとっては、私たち高校生のようフレッシュな存在が周りにいてくれるだけで、明日を生きる活力になっているそうです。これからの日本をより良くするために、私たち若者の役目は、知識や伝統を受け継いでいくことだと思います。そして、私たち高校生にとっては、さまざまな年代の方々との交流を通して、知識や経験を積み、自分の将来像を描くためのヒントにすることだと思います。探究活動で見つけた課題に対して、高校生は今だからできること、そしてその課題を解決するために、どうすれば一歩踏み出すことができるのか、しっかりと向き合っていくことが今後の活動にあたってとても大切になってくると思います。

「倉商 de キャッチ 倉商PBL」

岡山県立倉敷商業高等学校

倉敷商業高校では、これまでも地域活性化に貢献し、地域から信頼され、愛される学校を目指して、倉敷三斎市などのイベントや、ボランティア活動への参加、商業研究部による地域の調査、研究、地元企業とコラボした商品開発など、地域との連携を行ってきました。

今、社会は先行き不透明な時代だと言われています。そして、答えはない、あるいは、答えが無数にある中から、最適な答えを見つけ出さなくてはならない、そういう時代です。こういった時代だからこそ、自ら課題を見つけ出し、意思決定し、自ら解決する力が必要とされています。

倉商では、こうした力の育成を意識した3年間の学びにするために、1年生から3年生までの商業の学びの場を、教室から地域へ広げて、社会との関わりの中で活動を深めていく、PBL（課題解決型学習）に、計画的かつ系統的に取り組めるカリキュラムになっています。

倉商で「探Qの時間」と呼んでいる1年生の「総合的な探究の時間」と1年生から3年生までの有志による「倉商ツムグプロジェクト」と3年生の「課題研究」の2講座の活動を、『倉商deキャッチ』と銘打って紹介します。始めに、「探Qの時間」についてです。

まず、「探Qの時間」とは、1年生で毎週1時間行う「総合的な探究の時間」のことです。6月頃に自分の興味・関心でテーマを決め、夏季休業中に調査・研究し、9月に発表します。その後、グループをつくり、改めてテーマを何にするか決め、2学期から調査を始めます。調査結果をレポートにまとめ、3学期にその完成品を発表します。ここから昨年私たちが行った『伝統工芸品減少抑止の提案』という発表内容を紹介し



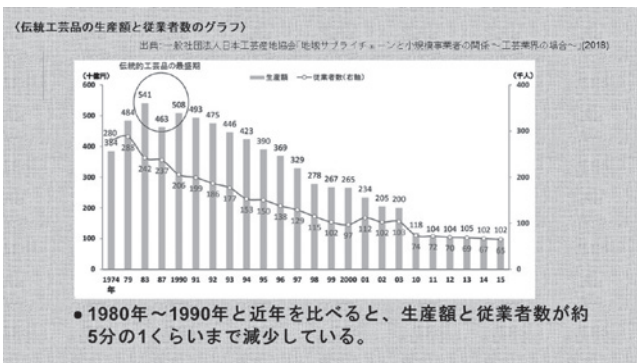
倉敷には、倉敷ガラス、い草、倉敷手まり、ジーンズなどの伝統工芸品があります。グラフは、伝統工芸品の生産額と従業者数をまとめたものです。最盛期であった1980年から1990年と近代を比べてみると、生産額と従業者数は、およそ5分の1くらいまで減少していることが分かります。伝統工芸は、一度、途絶えてしまうと復活することが難しいです。さらに、多くの場合、分業で製造を行っているので、

後継者が不足すると、その分業を行うことが難しくなってしまいます。そして、難しくなることによって、伝統工芸品の製造に大きな影響を及ぼしてしまうのです。つまり、伝統工芸品、伝統的文化の衰退と言えます。そこで私たちは次のような解決案を考えました。

1つ目は、メディアプラットフォームBECOSを使用することです。BECOSとは、ものづくりや伝統工芸

品に特化した通販サイトのことです。毎月20万人以上の人に見られています。ここに倉敷の伝統工芸品をより多く掲載することで、減少の抑止につながると考えました。

2つ目は、ウェブサイトを作ることです。これにより、どんな伝統工芸品があるのかを、いろいろな人に知ってもらうことができます。興味が湧けば購入してくれる人も現れるはずなので、減少の抑止と発展につながると考えました。その際、X（旧Twitter）など、SNSを使ってウェブページのリンクを貼ることで、知名度を上げることができると考えます。さらに、先ほど紹介させていただいた、BECOSの宣伝もできると考えました。



3つ目は、流行を取り入れるということです。これは、伝統工芸品を多くの人に認知してもらうために、ネット等で発信することや、地域のテレビ番組に取り上げてもらうことが有力です。また、伝統工芸品に人気のアニメやスポーツを組み入れたり、海外のブランドなどとコラボすることなども考えました。これにより、消費者に興味を持ってもらえるので、認知度が高くなると予測されます。

4つ目は、体験講座を開催するという事です。これは実際に興味を持ってもらうことで宣伝効果がある他、実際に体験することで、親近感が湧き、開催方法によって、若者へ強く影響を与えることができます。また、一般消費者に工房の現場を体感してもらうことで、物の価値も理解してもらえると考えます。さらに、少子高齢化による従業員数の減少の抑止が期待できます。私たちの提案は以上です。これらを実行に移すことで、伝統工芸品の減少抑止が可能であると考えます。これで、「探Qの時間」についての活動紹介を終わります。

次は、倉商ツムグプロジェクトです。

私たち倉商ツムグプロジェクトのメンバーは、2年生と3年生の合わせて26名の有志で、このスクリーンにあるようなミッションを果たすべく活動を続けています。私たちは、大きく二つのプロジェクト活動を進めています。

倉敷の繊維産業・繊維製品



1つ目は、地元の繊維産業について学び、それを校内で、また校内から校外へ発信するというものです。まず、私たちは倉商ツムグプロジェクトに関わるバスツアーに参加しました。い草栽培から製品製造までを行っておられる、今吉商店さん、私たちの制服も作ってくださっている明石スクールユニフォームカンパニー、そして、さまざまなデニム製品を作られている、ビッグジョン児島本店などにお

邪魔しました。

ご存じのとおり、倉敷は繊維のまちです。その中のい草について紹介します。岡山県のい草生産は、かつては日本一を誇りました。しかし、人々の生活スタイルや産業構造の変化によって、急速に減少していきました。しかし、現在でも、その加工技術は日本一だといわれています。畳表、ござだけではなく、コースター、アクセサリ、バッグまで、さまざまな製品が、ここ倉敷で作られています。私たちは、倉敷市西阿知地区

で明治30年に創業された今吉商店さんを訪ねました。今吉さんでは、実際に、さまざまな色のい草を使ったコースター作りを体験させていただきました。

2つ目は、倉敷公民館前と倉敷アイビースクエア内で、倉敷の繊維製品をPRするというものです。そこで、観光客の方々に倉敷の繊維製品についてのクイズを行いました。クイズは少し難しいと苦戦しながらも、楽しんでいただき、い草や帆布、畳べりなどで作成されたコースターのお土産も、とても喜んでくださいました。多くの方々に驚きと感謝の言葉をいただき、私たちもうれしかったです。また、倉商のマスコットキャラクターである「百算（ももさん）」も登場し、子どもたちから大人気でした。では、ここで当日行ったクイズを出題してみます。倉商ツムプロクイズ。

岡山では、大正時代から学生服が盛んに作られてきました。では、学生服が作られるようになる前には、何が作られていたでしょうか。3択です。①手袋。②足袋。③マスク。正解は何番だと思いませんか。

正解は、②の足袋です。大正8年には、岡山県下でも生産高2000万足に到達し、最盛期を迎えました。その後、足袋から学生服へ転換し、昭和10年頃には学生服の生産が盛んになりました。

プロジェクト②：美観地区での活動

クイズ出題

↓
コースターをお土産に

このページの写真は、「岡山県教育庁公設教育課」Facebookより



私たちは倉商ツムグプロジェクトを通して、さまざまなことを身に付けられたと思っています。まず、自ら調べたり、実際に見学や体験をすることで、倉敷の産業や文化・歴史について詳しくなるだけではなく、倉敷は自慢の地元だと思えるようになりました。また、プロジェクトを自ら行い、多くの方とコミュニケーションをとることの楽しさと重要性を感じました。そして、地域の一員としての自覚や誇りも感じました。今後も、私たち倉敷商業高校生は倉商ツムグプロジェクトを継続し、地域に誇りを持ち、期待に応えられるよう、地域に貢献できる人材に成長していくことを目指して活動を続けてまいります。

次は課題研究、地域経済探究講座です。

「課題研究」の地域経済探究講座で、私たちが1学期に行った活動や昨年3年生の先輩方が行った活動について発表します。まず、1学期は地域を知ることから始まりました。市役所や倉敷商業高校のある倉敷市中心部には、どのようなところがあるのか、まず見て歩き、地域経済分析システム（通称「RESAS」）で、興味のある分野についてデータをまとめ、レポートにまとめたりしました。私は、児島ジーンズとSDGsの12番目の目標である「作る責任・使う責任」が何か関連付けられないかと考えてみました。調べてみると、パイナップルの葉の繊維がジーンズの生地に使えるということを知りました。涼しく快適に使えるそうです。夏でもジーンズコーデを楽しめそうですね。私は、このようなことを調べてみて、見

プロジェクト①：倉敷いぐさ今吉商店

手話の「岡山」手話の「岡山」



い草コースターの制作



私たちは倉商ツムグプロジェクトを通して、さまざまなことを身に付けられたと思っています。まず、自ら調べたり、実際に見学や体験をすることで、倉敷の産業や文化・歴史について詳しくなるだけではなく、倉敷は自慢の地元だと思えるようになりました。また、プロジェクトを自ら行い、多くの方とコミュニケーションをとることの楽しさと重要性を感じました。そして、地域の一員としての自覚や誇りも感じ

【SDジーンズ】

ジーンズの原料はパイナップル!?
SDGs×児島ジーンズ



これまでにない材料をジーンズに使う取り組みが実現されています。国内最大のパイナップルの生産地・沖縄県。収穫した後に大量に残るパイナップルの葉に、地元でリサイクル事業を行っている会社「フードリポ」が注目しました。

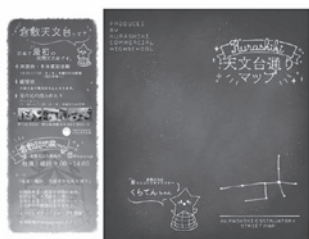
そしてこの繊維に、産業界に本社があるジーンズメーカー「エヴォイスジャパン」が注目しました。

SDGsを利用しながら児島ジーンズを作る



島ジーンズにも積極的にこのような取り組みを取り入れていったらいいのではないかと思います。

さて、ここからは昨年度の3年生が取り組んだことについて発表します。昨年、倉敷天文台の方から、天文台設立100周年を盛り上げるために、高校生のアイデアを取り入れながら、一緒に取り組めることはないかという提案をいただきました。そこで2学期には、倉敷天文台の認知度を上げるためには、どうすればよいかという課題に取り組みました。倉敷駅から南へ5分ほど歩いた所に天文台はあります。98年もの間そこにあり続け、天体発見王とも呼ばれた世界的アマチュア天文家の本田實さんは、ここでたくさんの新星を発見しました。もっと天文台の存在を知ってもらうために、近隣にある高校としてできることはないか、みんな



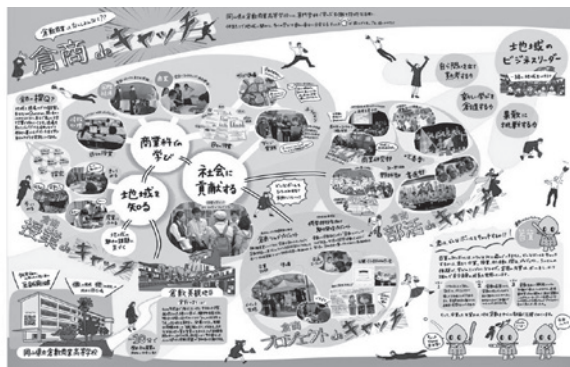
などで考えました。そして、倉敷天文台で毎週土曜日に開催される、倉敷路地裏マルシェに参加すれば、多くの人に来てもらうことができ、天文台の知名度が上がるのではないかと仮説を立てました。この5つ(①マルシェに出店②天文台にスポット③天文通りマップ作成④看板づくり⑤天文台の新キャラクター制作)の活動をグループに分かれて行いました。また、その準備の中で、天文台の方から次のよ

うなお話をいただきました。倉敷市立美術館南側の東西に伸びている通りは「白壁通り」という名前ですが、現在、眺めてみても白壁はありません。そこで、それを「天文台通り」に変えることができたら、天文台が近くにあることを認識してもらえないのではないかと考えました。そして、わたしたちは天文台通りマップを作成し、天文台通りにあるお店から商品を仕入れ、倉敷路地裏マルシェで販売することを計画しました。

倉敷路地裏マルシェへの出店は、10月と1月の2回行いました。10月は天候に恵まれ、フォトスポットも想像以上の効果を発揮しました。マルシェの開催時間は約5時間で、販売した商品がどれくらい売れるのか予想がしにくかったので、少しだけ仕入れ、店舗での価格とほぼ同じ価格で販売したところ、11時半頃には売り切れてしまいました。これを機会損失と言い、売れる機会を逃してしまうという失敗をしてしまいました。利益は、1,120円でした。

1月は10月の反省を踏まえて、各グループで10月以上の来客を見込んで準備しました。どの商品もほぼ完売に近いくらい売ることができましたが、キャンドルはこのまま残ってしまいました。1月の利益は1,540円となり、キャンドルが売れ残ったにもかかわらず、わずかながら利益を上げることができました。このことから、お客さまの立場になって考えることや、どれだけ利益を出すか、しっかり考えることが重要だと感じました。

先輩が、この授業を通して一番成長できたことは、「客観的視点を持てるようになったことだ」とおっしゃっていました。例えば、路地裏マルシェに出店する際に、どのようにすればお客さまに買いたいと思ってもらえるかなど、来られるお客様のことをずっと考えながら活動をしたそうです。以上、地域経済探究の活動と先輩の感想を紹介しました。



私たちは、先輩方の活動を引き継ぎ、失敗を恐れずチャレンジし、倉敷市のより良いまちづくりに貢献していきたいと思っています。次は、倉商AAA講座です。

私たちは倉商AAA（トリプルエー）という、倉敷美観地区で観光客へ向けて観光ガイドをすることを目標とした講座で学んでいます。先輩たちの取り組んだ内容を紹介します。講座名のAAAとは、Amigo Area Attendantの頭文字を取っており、友達のように親しみを込めて接しガイドをするという意味で名付けられています。活動内容は、1学期には地域について調査をしたり、観光産業について講義を受けたり、フィールドワークを行うなどしてガイドの準備をします。10月後半から11月の観光シーズンには倉敷美観地区へ行き、実際にガイドをします。3学期には、お世話になった方々へお礼状を書いたり、1年間を振り返ったりします。

ガイドの場所は、倉敷アイビースクエア、大原美術館、倉敷考古館周辺を中心とした倉敷美観地区一帯です。フィールドワークは倉敷地区ウエルカム観光ガイド連絡会の方のガイドを受けたり、美観地区を歩きながら建物や歴史を学んだりします。また、ガイドを行う上での情報を得るために、休日を利用して美観地区に行ったりしました。昨年、一昨年は新型コロナウイルスの影響で、美観地区を訪れる観光客も激減してしまい、活動も制限された2年間でしたが、コロナ禍で修学旅行が中止になった地元の小中学生を、先輩方が案内することもありました。先輩の感想には、「本当にできるか不安で仕方がなかったが、当日は天気もよく、楽しく美観地区を歩くことができた。」とありました。



倉商AAAは、観光客の方に倉敷の魅力を伝えられるようなガイドを目指しています。そのためにコミュニケーション能力を向上させ、倉敷についての知識をより深められるようにしています。倉商AAA講座の生徒は、「質問されたことは何でも答えられるような頼りがいのあるガイドになりたいです。」「国内・国外にかかわらず、たくさんの方に話し掛け、楽しく活動したいです。」「海外からの観光客の方とも会話を楽しみたいので、英語を頑張ります。」など、それぞれがなりたいガイド像を描いています。今後も仲間と協力し、観光客の方に来てよかったと感じてもらえるようなガイドができるよう、頑張っていきます。

以上が、倉敷商業高校の1年生から3年生までの倉商PBLです。

「岡山の伝統文化の継承と新たな文化の構築」 ～白石踊800年の歴史、岡山県産抹茶で地域活性化～

倉敷翠松高等学校

〈岡山県産抹茶で地域活性化〉

倉敷翠松高等学校地域探究抹茶ゼミです。私たちは、岡山県初の抹茶製造とその商品開発がもたらす地域活性化について発表します。抹茶を作ろうと思ったきっかけは毎週行われている茶道の授業です。私たちの高校は日本で初めて茶道を正課に取り入れ、2019年に抹茶教育・茶道教育50周年を迎えました。日々の授業では、知識や作法のみならず、和敬清寂の精神を学び、日常生活でも実践できるよう努めています。私たちの同級生は、お茶文化の普及のために本校茶道部と協力をして、地域探究活動の中で呈茶会の実施やお茶文化の発信をしていきました。その活動で高梁市のお茶農家の方と知り合い、岡山県初の抹茶製造に取り組みました。



倉敷翠松高校と茶道

日本で初めて
茶道を正課に

3年間毎週
授業がある



お茶の作法 和敬清寂の精神

風味を生かした商品は何か考え、茶そば、エクレアなど、さまざまな商品が考案されました。

そして、私たちの代になり2022年抹茶チャレンジがスタートします。地域活性化として私たちが最初に考えた場所は、地元、の美しい伝統的町並み、美観地区を考えました。現在、美観地区の町並みには空き家があり、そこを利用させていただくことができました。美観地区では、近年、町屋の空き家問題があり、今後は抹茶製品の販売を通じて、この問題の解決も考えていきたいと思っています。

まずは、茶摘みです。私たちのゼミのみならず、探求活動を行っている2年生特進コース、進学コースのみんなが高梁市の茶畑に行き、協力して摘みました。年々、収穫量は増え、一昨年は20キログラム。昨年、私たちの収穫量は32キログラムになりました。そして、今年の後輩たちが100キログラム収穫しました。いよいよ製品が完成しました。その名はアイス抹茶ミルクシェイクです。みんなが大好きな抹茶

また、抹茶は現在、世界的な需要が伸び続け大きなビジネスチャンスになります。抹茶がビジネスになることは、単にお茶文化の普及のみならず、農家の収入源の増加や耕作放棄地の解決など、さまざまな問題の解決へとつながり、地域の活性化を目指す、これが抹茶レボリューションでした。一昨年、倉敷市のそば屋、武野屋さんとコラボし、岡山県産抹茶を使った商品開発が始まりました。岡山県産抹茶の



パンナコッタにソフトクリームミックスと牛乳を掛け合わせた物です。仕上げに濃い抹茶を溶かした物を上からかけて、グラデーションを作ります。

この商品の特徴は、大きく三つあります。一つ目は、地元農産物をコラボした点です。今回、アイス抹茶ミルクシェイクを開発した背景には、倉敷市玉島で牧場を経営されている、チーズ工房ハルバルさんとの出会いがありました。今後は、このハルバルさんが作ったソフトクリームミックスとのコラボも考えています。岡山でしか味わえないこの商品は、観光品の目玉となるでしょう。



好評につきシェイク完売！



二つ目は、特別な機械が不要な点です。去年、町屋で販売しましたが、手軽に調理できるので、初期費用がほとんどかからず、普遍的な場所での販売が可能です。

三つ目は、オリジナルパッケージによるブランド化です。このキャラクターは、倉敷翠松高校のマスコットキャラクターである、まつぼうです。カップをデザイン化することで、より付加価値を高めました。

次に、価格については、現地でアンケートや聞き取り調査を実施しました。その結果、500円に決定しました。私たちが思っていた以上に、観光客の方々は抹茶商品への購買意欲が高いことも実感しました。販売前に収支予測を行いました。1日の売り上げは5万5000円で、支出は原材料費が主で、初期費用は冷蔵庫と照明器具の、合わせて26万5000円です。1日の収益から考えると、初期投資は早期に回収することが予想できました。

そして10月の秋季大例祭にて販売しました。北海道からの修学旅行生や、海外からの観光客など、たくさんの方々が訪れ、終了予定時刻より早く完売となる盛況ぶりでした。今回の販売を通して、改めて抹茶の需要が高まっていることを実感し、また、抹茶が地域の活性化につながる可能性を見いだすことができました。

一方で課題もありました。支出が大きく予想を超えたことです。理由としては、一つ目は外注によるコストの増大です。二つ目は、当日、気温が高く、収益率の高い抹茶セットの売れ行きがよくなかったことです。そこで、今後はこれらの課題を解決していきたいと考えました。また、さまざまなコンテストへの参加や、FMくらしきでの収録・発表などを通して、岡山県産抹茶について知ってもらう活動も行いました。



商品開発

地域の力で地域を活性化！



人
商店 農業



本日は修学旅行のため参加できませんでしたが、現在は後輩たちが引き継いで、さらなる発展を目指しています。今年度は、抹茶の本場である宇治市にある立命館宇治高校と連携して、お茶を使った町づくり、お茶でつながるをテーマに、さらなる商品開発や、お茶文化普及のための活動を行っています。地域の人、産業が、岡山県産抹茶でつながり、地域の力で活性化に挑戦する活動を、これからもさらに

進めてまいります。

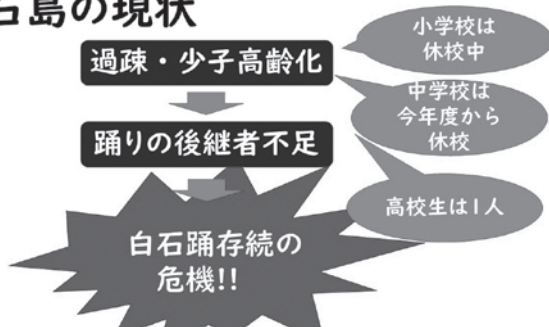
〈白石踊800年の歴史〉

白石踊探究班です。私たちは笠岡市の白石島に伝わる白石踊の魅力や、伝統・歴史について学ぼうと考えました。白石踊の始まりは、源平合戦の中の水島合戦で、白石島に流れ着いた戦死者を、島の人が供養したことが起源とされています。水島合戦は1183年、現在の倉敷市の水島灘と呼ばれる海で行われました。水島灘とは、この辺りです。合戦のさなか、金環日食が起きました。天変地異だと混乱する源氏に対し、事前に日食を予測していた平家側が、混乱に乗じて勝利したという戦いです。

白石島は、笠岡諸島の島で、人口は約400人住んでいます。海水浴場ではマリンスポーツを楽しめ、自然豊かな島です。海岸の清掃をボランティアで行いました。そんな白石島に伝わる白石踊の特徴は、手拍子がなく、代わりに静かに合唱するところです。死者を弔い、平和を祈る気持ちが込められているからだと思います。また、白石踊は、誰でも気軽に踊りの輪に招き入れることも、特徴の一つです。昨年11月、ユネスコ無形文化遺産に登録されました。

ところが、白石島は過疎、少子高齢化が深刻です。小学校は既に休校していて中学校も去年から休校しました。島にいる高校生は1人だけです。踊りの後継者不足に直面しており、白石踊の存続の危機です。そこで、私たちは白石踊の継承活動に取り組んでいこうと考えました。まず、踊りを習い、自ら継承者になるために、校内練習会を開催し、実際に白石踊会の方々に来ていただき、基本のブラブラ踊を中心に、いくつかの踊りを覚えました。継承、広報、環境整備、交流人口など、四つの分野で活動しました。11月の練習会では、読売新聞や倉敷ケーブルテレビから取材を受けました。

白石島の現状



令和4年11月8日
倉敷ケーブルテレビ



白石踊800年の伝統を受け継ぐ



白石踊探究班

2023. 7. 14

は、読売新聞や倉敷ケーブルテレビから取材を受けました。

広報としては、長らく更新の止まっていた笠岡市役所の白石踊のホームページに、毎月、原稿を書き載せていただいています。高校生の活動報告のコーナーもありますので、ぜひ見てください。これは、倉敷芸文館で開催された、備中伝統芸能フェスティバルの際の写真です。私たちは、ロビーで白石

広報

風立つライオン基金
高校生ボランティア・アワード2022 全国大会



新宿住友ビル三角広場 2022年8月16日～17日

踊PRの展示をしました。また、そのときの感想を新聞投稿して、山陽新聞に掲載していただきました。さらに、さだまさしさんが設立した、風に立つライオン基金が主催の、高校生ボランティア・アワード全国大会に出場して、私たちの活動や白石踊について、全国の高校生たちと交流してきました。

白石島を訪れてくれる人を増やそうと、交流人口に関係する活動もしています。これは、昨年7月16日に開催された白石踊ツアーの様子と新聞記事です。多くの観光客の方が、白石踊の鑑賞と踊り体験に参加していました。私たちもその踊りの輪に加わりました。そのときの様子が、文化庁の地域の伝統行事等のための伝承事業として、YouTube番組になっています。私たちが白石踊を受け継ごうとしていることも取材していただきました。私たちの祭り探求5と調べて、ぜひ見てください。

白石島に人を呼ぶための方法を学ぶために、福山にある企業さんが主催する花火大会も見学に行きました。当日は、屋台も出ていて活気がありました。そして、白石踊を多くの方に知っていただくため、高校生による岡山の歴史・文化フォーラムに参加しました。そこで、優秀賞を受賞することができました。また、日本経済大学主催の全国高校生ビジネスプランコンテストにも応募し、敢闘賞を2グループが受賞することとなりました。さらに多くの方に、白石島、白石踊の魅力を発信しようと、新聞コンクールにも応募しました。

この1年間で、白石踊とはどんな踊りなのか知り、歴史や文化を調べ、できるだけ多くの場で白石踊を広めることができ、とても良かったです。これからも、白石踊が継承され、少しでも多くの方に知ってもらえるように活動していきたいです。



高校生による岡山の歴史・文化研究フォーラム
11月20日(さん太ホール) 優秀賞受賞